特別支援学級の児童と通常学級の児童から学ぶ

～南知多町立師崎小学校･ひまわり学級～

活動先　師崎小学校

１．はじめに

私たちの班は、メンバー全員が特別支援学校の教員になることを目指している。そこで、通常学級と特別支援学級とではどういう違いがあるのか、あるいは同じ点はあるのか、さらにはそれぞれどのような工夫がされているのかという疑問を持った。その疑問を実際の現場から学びたい！地域と学校のつながりを見てみたい！だからできれば、大学に近い地域で活動したい！と考えたため、１年を通してこの活動を行うこととなった。

２．活動先紹介

南知多町立師崎小学校

詳細：愛知県、知多半島の先端の港町に所在。

全校児童１１２名、７学級（うち特別支援１学級)、職員数１３名

沿革：明治５年に地域の願いで郷学校として設立された「養鯨学校」がその前身。

明治２０年に「尋常小学校　師崎学校」、その後、昭和３６年に現在の名称である「南知多町立師崎小学校」となった。

特色：地域の人に愛され大切にされた学校で、「海の青さ」「山の緑」に恵まれた素晴らしい環境にある。

また学校の裏山は「里山」と呼ばれ、雑木林に鳥のさえずりが聞こえ、果樹が実る遊び場があり、平成２２年度は「合いにあふれる学びの場で育む児童と教師」をテーマに、自然環境と地域の教育力を生かした特色ある教育活動を展開している。「あいさつ　返事　はき物をそろえること」を毎日のめあてとして、人として大切なしつけを育んでいる。

３．活動目的・方法

活動目的は、特別支援学級と通常学級の違う点・同じ点・工夫されている点などを調査することである。そのためには実際に学校に赴いて調べる必要があると考え、6 月に特別支援学級の児童と通常学校の児童の学校生活から学ぼうと実際に現地で取り組んだ。

４.仮説

まず活動するに当たって私たちは特別支援学級へ在籍している特別なニーズをもつ児童と通常学級へ在籍している児童の双方の児童間においてそれぞれに教育指導的観点から、取り組みの中で相違点あるいは工夫されている点などがあるのではないかという仮説を立てた。具体的には時間割と教材、また道徳教育で求められる教育目標が同じ点で、授業のペースと教室、先生の児童に対する接し方、それぞれに出される課題・教育方法などにポイントを絞り、そこにおいて異なる点があるのではないかと仮説した。しかし、仮説を考えているうちに、特別支援学級の級友がいることで、周りの子どもたちの中には障がいや個性を理解し考えることができるなどの良い影響を受けている子が多いのではないか、影響を受けないということがあるのだろうかという疑問も浮かび上がってきた。

５.活動内容

現在までに行った活動の主な内容は以下の通りである。

◇５月上旬　　知多半島地域に絞り特別支援学級のある小学校を調査
◇５月下旬　　南知多町立師崎小学校と交渉成立
◇６月３日（木）師崎小学校へ事前訪問（目的の確認）
◇６月１６日（水）師崎小学校で活動（プール清掃）
◇９月２５日（土）師崎小学校運動会・町民体育大会にボランティアとして参加
◇１１月２２日（月）師崎小学校資源回収に参加予定だったが雨で中止

（１）師崎小学校１回目の訪問「プール掃除」

２０１０年６月１６日水曜日に南知多町立師崎小学校へ訪問した。師崎小学校には特別支援学級として「ひまわり学級」が置かれ、４年生と６年生の二人が在籍していた。この日は４・５・６年生のプール掃除に参加させていただき、先生方の指示のもと特別支援学級の児童にそれぞれ付き添いながら活動を行った。６年生のＡ君は今年の４月からひまわり学級に入ったのだが、人見知りが激しく、なかなか距離を縮めることができなかった。A 君は、抽象的なものの理解が困難で、非常にこだわりを持った子であるということだった。ご両親は今まで A 君になにか障がいがあるということを認めたくなく、それまでは「大丈夫」と思っていたものの、やはり学力の遅れが気になるため、中学校への進級のことも考え、意を決して特別支援学級に所属させることになったそうだ。このことから、社会の中に、障がいに対する何か偏見のようなものが存在しているのではないかと感じられた。4 年生の B 君は 1 年生からひまわり学級に入っており、A 君とは対照的にどちらかというと社交的で、私たちにも積極的に話しかけてくれた。物事にすぐ飽きてしまう傾向があり、落ち着きがないように感じられた。

図 1

活動を通して限られた時間内だけの接触ではあったが、その間には在籍する学級の違いから来る児童間の隔たりは感じられなかった。そこから、日ごろからの児童間の関係づくりに対する学校側の配慮や姿勢が伺えた。あるいは、地域色から１学年が少人数であり、幼いころからお互いに馴染みのある環境で育ちあってきたことも関係しているのではないだろうかということも考えられた。

振り返りとして第一回目の活動は急遽プール掃除に変更になり、授業を見学することができなかったため仮説検証には至らなかったが、自分たちが持っていた視点として私たちが立てた仮説が授業内に関するものばかりに留まっていたことに気付くことができた。

（２）師崎小学校２回目の訪問「運動会・町民体育大会」

２０１０年９月２５日土曜日に再び南知多町立師崎小学校へ訪問した。第２回目の活動にはボランティアとして参加させてもらい、運動会運営や児童たちの補助に携わった。登校時間前の準備に始まり、職員会議への参加、１日の流れ・注意事項の確認、そして活動（午後からは町民体育大会への参加）から片付けに渡る充実した１日を過ごさせてもらうことができた。

図２

活動を通して師崎小学校の先生方の教師としてのプロフェッショナルを学ばせていただくことができた。また児童だけでなく師崎地区の町民の方々と接する機会が多く持てた１日であった。師崎という地域では、保護者や地域住民と児童との関わり方の中に地域コミュニティーが希薄化していると言われている現代社会には珍しく、地域で支え助け合いの心のような伝統的な付き合い方が残っているように思われた。そこから地域が教育に介入していくことの大切さなどを学んだ。

６．まとめ

はじめに、私たちは活動を行う前に立てた仮説を検証し調査させてもらうことを目的としていたが、受け入れてくださった訪問先が小学校であるということと、こちらの大学の講義日などの重なりから、兼ねてから希望していた小学校での授業見学は実現に至らなかった。しかし、当初授業の様子のみに着目していたが、その他の活動に参加させていただいたことによって、もう少し広げた範囲から授業だけでは得ることができなかったであろうものを得たと感じられた点は大きかった。

また、私たちの班は活動をするたびに私たちの行っているものは本当にサービスラーニングなのだろうかと毎回の振り返りで悩んできた。自分たちの活動をどうサービスラーニングとして活かしていけば良いのかわからず、サービスラーニングに結びつけるための要素も得られていなかった。つまり、私たちの行ってきた今までの活動はどちらかといえばボランティアと位置づけられるものであったといえる。しかし子どもたちの発してくれた興味関心に自分たちが応えられるのではないだろうかということに気がついてから、ボランティア活動をサービスラーニング活動に活かしなおしていくことができると考えた。

７．今後について

まとめにも記したように子どもたちが発してくれた興味関心というのが「ふくし」であり、現在私たちが真正面から向きあっている分野である。そこで、現役で「ふくし」を学ぶ学生としてその興味関心に応えられるのではないかと考え、総合学習の時間に機会があれば子どもたちにふくしの魅力をぜひ伝えたいと思った。しかし現状はまだ企画段階であるため来年度も継続して実現に向けて取り組んでいきたいと思う。

８．次年度活動する学生へ

私たちは問題関心をきっかけに自分たちで地域の小学校を調べ、目的を伝えアポイントメントを取り活動させてもらうに至ったのだが、その経験というのは教育実習生でもなくインターンシップでもないものであったが、教師を目指す私たちにとってとても有意義で貴重な時間であった。今、何かに対して興味関心や問題意識があってもなくてもサービスラーニング活動をしていくなかで何か得られるものはあると思う。そこが新しい気付きや活動への出発点になることもある。大学生活という期間に与えられたチャンスを無駄にせずにぜひ思い立ったら行動をしてみることの価値を見つけてほしい。

図１、２　撮影日：２０１０年６月１６日
撮影場所：師崎小学校
撮影者：松本瞳美さん